

上田閑照の「自己の現象学」における無我と非我について

桑山裕喜子（東京大学大学院総合文化研究科）

上田閑照の「自己の現象学」をテーマに挙げるとき、まず念頭に置かれるのは上田による「十牛図」解釈であろう。しかし、上田自身の編纂により 2001 年から 2003 年の間に出版された『閑照集』において彼の「自己の現象学」は、自身の「十牛図」理解に依拠しながらも、それ以上の広がりをもって語られている。また『閑照集』第十巻（2002 年）の自序においては、自身の「自己の現象学」が上田自身の「十牛図」理解を「手引き」にして展開されたことが明示されてもいる（上田 2002b, p. 3.）。本発表では、主に『閑照集』第六巻「道程『十牛図』を歩む」（2002）と『閑照集』第十巻（「自己の現象学」（2002））、そして 2012 年に Karl-Alber 社より出版された *Wer und was bin ich? Zur Phänomenologie des Selbst im Zen-Buddhismus* を一次文献とし、上田閑照研究においてあまり注目されてはいないと見受けられる「無我」、selbstloses Selbst および Selbstlosigkeit を主題としたい。

第六巻と第十巻の両方を参考にした上で最も重要な上田のテーゼは、両巻を通し繰り返し見受けられる「我は、我ならずして、我なり」という一文に見出され得るだろう。これは、「我とは」と問う主体がその問われる「我」自身からも解放され、つまりいわば「我」を忘却した「無我」の「無底性」から自ずと「我」へと還ってくるその動きそのものと捉えることができる。上田は「自己は一つの運動である」といい、「自己から出て自己に戻る」運動そのものであり、その動きの中に「他者との交わりおよび物との関わりが組み込まれている」と説く（上田 2002b, 9）。上田はまた、「我とは」と問うた後に実際に「我」を無我とは異なった意味で忘却し、無底性から起こる自己への自発的回帰を果たさずに自己疎外にとどまる「我」もありうることを指摘してもいる（ibid., 138）。では、その際に決定的な役割を果たすと見られる「無我」という「はたらき」（ibid. 142）とはどのようなものであるのだろうか。発表ではこの問を主題とし、特に「十牛図」の第九図にある頌の最後部「水自茫茫花自紅」の上田の解釈を捉え直すことを通し、改めて「無」の語に含まれた意味を反省することを目標とする。